

千葉大学における海外共同学習プログラム

ーフィンランドの協定校の学生との協働の学びー

Collaborative Learning Program at Chiba

University:

Joint Project with Sister University in Finland

千葉大学国際教育センター 教授 新倉涼子

NIIKURA Ryoko

(Center for International Research and Education, Chiba University)

キーワード：海外共同学習プログラム、協働の学び、フィンランド、短期留学

フィンランドの協定校との海外共同学習プログラム

本プログラムは、千葉大学（以下「本学」という。）とフィンランドの協定大学であるセイナヨキ応用科学大学において、ホスト校とゲスト校を入れ替え、隔年で開催する共同学習プログラムである。平成 23 年度から SS/SV（ショートステイ/ショートビジット）プログラムとしてスタートし、平成 26 年度で 4 年目になる。プログラムの実施期間は夏期休業中の 2 週間としている。

毎年、本学の学生 10 名～15 名とセイナヨキ応用科学大学の学生 10～15 名、計 20～30 名の学生がグループを形成して、設定されたテーマについて問題提起し、企画・調査・分析・発表を協働して行うプログラムである。協働の学びを通して問題解決能力の養成や、文化的背景の異なる学生同士が連携して学ぶプロセスに必要な異文化対応能力を養うことを目的としている。

本プログラムでは毎年、両大学の教員が共同して課題を設定し、その課題に対して学生それぞれが興味を持つ学問領域から問題を発見し、その解決案を提案する。ワークショップ期間中は両大学の教員も学生と共に考え、学生の企画・調査・分析・発表をサポートする。授業はすべて英語で行われる。

平成 23 年度はセイナヨキ応用科学大学がホスト校となり、「Design for Home Care System toward the Future」のテーマで、平成 24 年度は本学がホスト校になり、「GREEN KIOSK -Tomorrow's Plant Factories」のテーマで、25 年度は再度セイナヨキ応用科学大学がホスト校となり「Learning Environment: Schooling & Community」をテーマとして共同学習を実施した。

本プログラムは、授業科目名を「グローバル・スタディ・プログラム」として、普遍科目の教養展開科目（2 単位）として実施されており、所属する学部学科にかかわらず全学部より学生を受け入れ、設定されたテーマに興味関心を持つ学部生に広く海

外学修の機会を提供している。平成 25 年度からは海外共同学習プログラムとして、フィンランドに加え、ベトナム、マレーシアの協定大学との共同学習も開始した。

本稿では、フィンランドにおける協定大学との共同学習プログラムについて報告することとする。

1. プログラムの特色

本プログラムは以下の特色を持つ。

- ・語学研修プログラムとは異なり、海外協定校の学生らと英語で専門知識を学ぶことにある。
- ・両大学の教員が共同で課題を設定し、連携してプログラムを実施する。
- ・普遍教育（教養教育）であることから、学生の専門分野がテーマと異なる場合であっても、各テーマに興味があれば参加ができるように組み立てられている。
- ・異なる専門知識や文化的背景をもった学生達が多分野をまたいで集まり、設定されたテーマについて様々な視点から考えることを目的としているため、英語によるコミュニケーション能力の向上だけではなく、専門分野以外の興味の枠を広げるきっかけにもなる。
- ・海外の大学の学生間の協働での学習、アクティブラーニングの実践や問題解決型学習に重きをおくことにより、問題解決能力を高めていく。
- ・ワークショップでは本学学生とセイナヨキの学生が小グループを形成し協働作業を行い、両大学の学生が協働して、課題解決にあたる。
- ・フィールドワークにも現地学生とグループを組んで参加してもらい、興味深い点やわからない点など、その場でディスカッションができる環境を常に意識的に用いている。
- ・昼食を現地学生とともに取るなど、現地学生との交流の時間を多くとるだけでなく、内容にも幅を持たせている。
- ・英語を道具として用いながら、日本と相手国に通ずる新たなサービスやシステムの提案を行う協働作業を通して、文化的背景の異なる学生同士が連携して対応できる異文化対応能力を身につけていく。
- ・受講希望者にはアンケート記入を義務付け、受講動機や自己 PR を勘案して選考している。
- ・選考時に求める英語力に関しては、多様な視点からプログラムに必要な語学力を評定することとし、個々の学生の語学に関連する経験、提出された英語の書類、面接等を相対的に評価する。
- ・日本での準備教育と渡航中のワークショップにおいて、英語によるプレゼンテーションを複数回実施することから、英語プレゼンテーション能力の向上をはかる演習を実施、英語での伝達能力向上を図る。参加者の中には、ふだん英語でアウトプットする機会が少なく、理論的に話を組み立てて説得力の高い発表をする自信がない学生もいると考えられるため、英語によるプレゼンテーションの指導が可能な教員とプログラムのテーマの専門教員が協力し、学生の英語プレゼンテーション指導にあたる体制を作っている。

- ・フィンランドに初めて訪れる本学の学生が多いことを念頭に、ホスト校と本学の参加学生混合でいくつかのグループを形成して学習を進めるだけでなく、その他の現地学生や地域の住民との文化的交流活動を計画する。(本学で実施する場合も同様)
- ・普遍教育科目として2単位の付与を行う。派遣先大学との共同で作り上げるプログラムであるため、派遣先大学の単位を本学で認定する必要はなく、一般的な本学の授業と同じように単位を付与する。
- ・2週間程の海外派遣に併せて、事前教育と事後教育が行われる。事前教育は複数回に分けて行われる。海外における学習をより効果的にするため、事務手続きや安全管理準備の他、英語プレゼンテーション演習や派遣先国の言語や文化について学ぶ時間を設けると共に、相手国の参加学生らとの交流を Skype 等を用いてオンライン上で実施する。
- ・事後教育は、学生が海外での経験を省察し、今後の進路などに活かせるための機会として、事前教育と派遣先で学んだことをもとに学習成果報告書を作成して提出し、教員から評価を受ける。また、国際教育センター等が企画する派遣報告会などに参加し、各自の体験を他の学生たちと共有していく。
- ・本学学生の渡航、受入れにおける緊急事態発生時の対応を含め、海外渡航及び留学生受入等に際しての安全の確保に関する全学的危機管理体制のもとに実施される。

2. プログラムの実施事例の紹介

平成 23 年度にフィンランド・セイナヨキ応用科学大学で実施したプログラム、平成 24 年度に本学で実施したプログラム、および平成 25 年度にセイナヨキ応用科学大学で実施したプログラムについて報告する。

(1) グローバル・スタディ・プログラム (平成 23 年度) :

「Design for Home Care System toward the Future」

第 1 回目にあたる平成 23 年度は、学部生 10 名をフィンランドに派遣し、ホスト大学の学部生 (10 名) とワークショップを実施した。全学から受講者を募った本プログラムは、普遍教育における教養展開科目 (2 単位) として開講され、派遣者全員に日本学生支援機構の奨学金 (「留学生交流支援制度 (ショートステイ・ショートビジット) プログラム」) が支給された。

夏休みにフィンランドで実施した 2 週間のワークショップでは、「未来の在宅ケアシステム」という課題に対して、両大学の学生が小グループを形成し、企画・調査・分析・発表までを行うプロセスを通じて、両国の在宅ケア・システムについての知識を深め、現状の問題点を学生自らが発見してその解決案を考察し、両国に通ずる未来の「あるべき姿」について提案を行った。

事前教育

本プログラムは、本学の工学部デザイン学科と看護学部の教員が連携して本学学生の事前教育（授業）を行い、国際教育センターが英語でのプレゼンテーション演習とクロスカルチュラル・トレーニング、派遣全般のプログラム・コーディネートを行い、支援体制の整った共同学習プログラムとして実施した。

ワークショップ

ワークショップ期間中は、教員も共に考え、学生のフィールドワークや提案準備などに両大学の教員が加わった。

<第1週目>（ファクト・ファインディング）

両大学の学生が、それぞれの国の在宅ケアの問題点について、各人の専攻領域や興味関心のある内容から調査した結果を英語で10分間プレゼンテーションを行ったあと、フィンランドの在宅ケアの施設を見学し、高齢者等へのインタビューを通して学んだ現状の問題点をまとめてグループ発表を行った。

<第2週目>（アイデア・ジェネレーション）

これまでに理解した問題点を解決するにあたり、未来の在宅ケアのために必要と思われるサービスや製品等をグループで決定し、そのプロトタイプを作成した。また、作ったプロトタイプを持って高齢者等を訪問してフィードバックをもらい、改善を加える協同作業を重ね、ワークショップ最終日に提案内容を発表した。



(2) グローバル・スタディ・プログラム (平成24年度):

「GREEN KIOSK - Tomorrow's Plant Factories」

プログラムの2年目であり、本学にセイナヨキ応用科学大学の学生14名を受け入れ、本学学生15名と共にそれぞれが考える便利で小さい植物工場を町中に点在させるための「GREEN KIOSK」の「ビジネスモデル」を検討した。

平成24年度は、本学で実施された。セイナヨキ応用科学大学からの派遣者14名のうち10名に日本学生支援機構の奨学金(「留学生交流支援制度 (ショートステイ・ショートビジット) プログラム」)が支給された。

事前教育

本プログラムは、本学の工学部デザイン学科と園芸学部の教員および国際教育センターの教員が連携して本学学生の事前教育(授業)を行い、同じ課題について、セイナヨキ応用科学大学の学生については、同一課題について、連携教員の事前教育を実施し、支援体制の整った共同学習プログラムとして開始した。

ワークショップ

両大学の学生が小グループを形成し、企画・調査・分析・発表までを行うプロセスを通じて、2つのトピックスを組み合わせた、GREEN KIOSKについて考え、それぞれが考える便利で小さい植物工場を町中に点在させるための「ビジネスモデル」を検討した。ワークショップ期間中は、教員も共に考え、学生のフィールドワークや提案準備などに両大学の教員が加わった。

<ワークショップのプロセス>

大規模な郊外型の工場である「植物工場」を売店、ニューススタンドなどの簡易構造物一般を意味する「KIOSK」とを一体化し、便利で小さい「GREEN KIOSK」について、ビジネスモデルを考えることを課題とし、グループワークを開始した。

グループはセイナヨキ大学生と本学学生が半々になるようにし、計6グループを構成し、グループ内の討論、途中経過の報告を行うミニプレゼンを行う中で要点を精査していった。その間、本学柏の葉キャンパスにある「植物工場」を見学、園芸学部教員からの講義、および施設を見学し、問題点を検討、内容の改善を検討した。

これまでのグループ内での討論、ミニプレゼンからフィードバックをもらい、改善を加える協同作業を重ね、ワークショップ最終日に提案内容を発表した。



(3) グローバル・スタディ・プログラム（平成 25 年度）：
「Learning Environment: Schooling & Community」

プログラム 3 年目の平成 25 年度はセイナヨキ応用科学大学において行われた。世界のグローバル化の中で、学校や地域コミュニティにおけるインクルーシブで公正な学びの環境をどう作り上げていくかを提案した。

平成 25 年度は、学部生 13 名をフィンランドに派遣し、日本学生支援機構の奨学金（「留学生交流支援制度（短期派遣）プログラム」）が支給された。

本プログラムは、普遍教育における教養展開科目（2 単位）として開講された。

事前教育

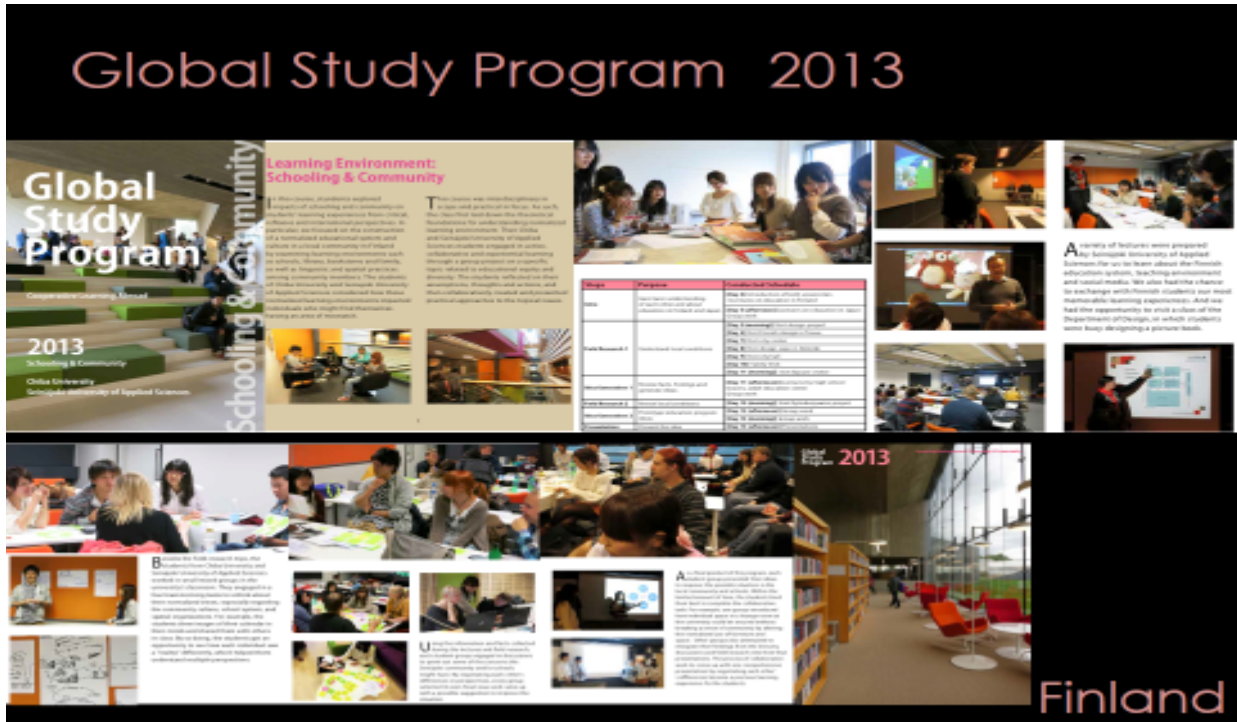
授業に関するリーディングアサインメントが双方の学生に課せられ、その内容についての批判的見解や別の見方などについて事前に考えをまとめて記述した。

ワークショップ

4 人グループ（本学学生 2 名＋セイナヨキ応用科学大学生 2 名）のグループを構成し、事前のアサインメントを共有し、多様な言語・文化的背景をもった子どもたちの学びの環境を改善するための教育政策、カリキュラム等についてのプランを立てていった。

グループ内の討論、教員の講義、フィールド調査をとおして内容を精査していった。

グループ内での討論、途中経過の報告を行うミニプレゼンでフィードバックをもらい、改善を加える協同作業を重ね、ワークショップ最終日に提案内容を発表した。



3. 海外共同学習の成果

学生が提出したファイナルレポートでは、設定された課題について学んだ内容に加えて、2週間にわたる協働作業を通して、両大学の学生が問題解決能力を高めていった様子や、異なるバックグラウンドを持つ学生との協働学習を通じて異文化対応能力を高めていったプロセスについて、いきいきとした言葉で報告する学生が多く見受けられた。

グループを形成し、企画・調査・分析・発表までを協働で行うプロセスを通じて、問題点の発見からモデルの提案までを学生主体で行ったことについて、「仲間と一緒に選んだテーマについての問題点を掘り下げ、話し合いながら作業するプロセスが面白かったし、それにより創発性が高まることに気づいた。」、「日本人学生と一緒にこのワークショップを通して日本人の行動様式について多くを学んだ。」、「フィンランドの学生も皆まじめで謙虚で、自分たちと似ているところが多く、とても親しみやすかった。」「2週間もの間同じ課題と一緒に向きあっていると、ひとりひとりが個人として見えて、個々のパーソナリティを感じながら接することができたのは大きな収穫だった。」、「納得のいくアイデアが出るまで妥協せずじっくりと話し合う姿勢は両国に共通しており、新しいアイデアに作り変えていく作業も協調性をもって進められた。」

また、「フィンランドの学生は、自分の意見をはっきり言う一方、こちらの話もしっかりと聞いてくれた」「英語がスムーズに出てこないこともあったけど、恥ずかしがらずに自分の意見を言って理解しあうことの大切さに気づいた」などのコメントが双方の学生から寄せられ、本海外共同学習プログラムのねらいである「文化的背景の異なる学生同士が連携して主体的に学び、言語や行動様式、価値観の違いを相互に調整しながら課題を達成する」目標はひとまず達成できたと思う。同時に、こうした海外

共同学習を今後さらに促進していくことの必要性を再確認した。

セイナヨキ応用科学大学に派遣された学生たちは、フィンランド滞在中、日本文化紹介を行い、積極的に国際交流を行った。帰国後のレポートで多くの学生が、これを機に、さらなる留学や異文化交流を行いたいと多くの学生が抱負を述べており、派遣の経験を通して各学生が海外に目を向ける機会を提供できたといえる。

平成24年度に本学で実施した際には、両国の学生たちは、「Cultural Tour」に一緒に出かけ、セイナヨキの学生にとっては初めて直で日本文化を学ぶ機会を、また本学学生には傍らに寄り添い英語で日本文化を紹介することの難しさを体験し、双方にとって有意義な Tour となった。